

## 言葉遊び

令和5年度の授業が始まりました。1年生の国語の授業では詩人谷川俊太郎さん作「朝のりレー」という詩について鑑賞しました。

カムチャツカの若者が  
きりんの夢を見ているとき  
メキシコの娘は  
朝もやの中でバスを待っている  
ニューヨークの少女が  
ほほえみながら寝がえりをうつとき  
ローマの少年は  
柱頭を染める朝陽にウインクする  
この地球では  
いつもどこかで朝がはじまっている  
ぼくらは朝をりレーするのだ  
経度から経度へと  
そうしていわば交替で地球を守る  
眠る前のひととき耳をすますと  
どこか遠くて  
目覚まし時計のベルが鳴ってる  
それはあなたの送った朝を  
誰かがしっかりと受けとめた  
証拠なのだ

導入は、この詩の早口音読りレーです。早口音読は脳が活性化し学習効果が上がると、科学的根拠を基に、明治大学教授 齋藤孝先生が推奨しています。続いて言葉遊びとして「猫が寝込んだ」生徒たちが、ダジャレを発表していきました。トリは鈴木先生で「福島県の人服しましま」と言って生徒たちを笑わせました。ダジャレを考えることは脳の活性化と使える語彙を増やすことにつながるので、言語能力を高める練習になります。

小生のような世代がダジャレを言うと「親父ギャグ」などと若い世代から言われてしまいます。本当のオヤジは疲れて、ダジャレすら言えないと思うのですが。

花の色は移りにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに

古今和歌集に収められた小野小町の有名な歌です。この和歌では、雨が「降る」と時が経つ意味での「ふる」、そして、眺め「ながめ」と長雨を意味する「ながめ」一つの言葉に二つの意味をもたせています。これは、和歌の修辞法のひとつである『掛詞』という技法です。したがって、歌の意味は「美しく咲き誇っていた桜の花びらも、春の長雨が降り続く間にむなしく移ろい色あせ、同じようにわたしの若さも容色もすっかり衰えてしまった。なすこともなくこの世に生きてじっと物思いに沈んでいるうちに。」掛詞の構造はダジャレと同様。平安時代あたりでよく使われたようで、小野小町に代表する高貴な方が用いた表現技法です。すなわち、ダジャレを扱う小生世代は、高貴な表現技法の使い手と言えるのです。

2年の理科は、原子について授業でした。原子の大きさに対するテニスボールの大きさの割合と、テニスボールの大きさに対する地球の大きさの割合が同じくらいというのですから、原子がいかに小さいのか理解できます。「もしも原子が肉眼で見えたら？」という問いに反応して、生徒から様々な意見が出ました。「原子まで見えたら、人を好きになれない！」奥が深い発言です。人を好きになるって、見え過ぎてもいけないのですね。

思ひつつ 寝ればや人の見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを 小野小町

歌意 『恋しいと思いながら寝たから、あの人が夢に現れたのでしょうか。もし夢だとわかっていただければ、覚めないでほしいものを。』

小野小町さんも見え過ぎないように眼を閉じたのだと考えることにします。見え過ぎないことで夢の世界が広がりそうです。